大島真由美 ステイトメント全文

「アイさんからお手紙が届きました。」

彼らは、第三恒星系の青くてほどよく湿った惑星に広く分布する、言語を用いる二足歩行の生物である。服を着たり、火を使ったり、スマートフォンを見つめたりする姿がよく見られる。本人たちは「知的生命体」を自称しているが、その動きは驚くほど感情と本能に素直である。
この種の行動パターンはとても興味深い。空腹、不安、欲求、孤独、好奇心など、ごく原始的な本能が彼らの文明や日常を支えている。食べたい、認められたい、楽したい——そんな気持ちが、都市を生み、経済をつくり、インターネットを発展させた。つまり、彼らの社会は複雑なようでいて、その根っこはかなりシンプルである。
とはいえ、彼ら自身はそのシンプルさに無自覚なことが多く、自分たちの欲望や感情に立派な名前をつけて扱うのが得意だ。競争は「向上心」、休みたい気持ちは「ワークライフバランス」、好かれたいという願望は「自己ブランディング」となる。この言葉づけの技術もまた、彼らの特性である。
とくにおもしろい能力のひとつは、「ただのものごとに意味や人格を見いだす」こと。これは彼らにとってごく自然な行為で、たとえば布と綿の集合体は「くまのぬいぐるみ」に見え、そこに名前をつけ、気持ちを話しかける。雲の形にはストーリーを見出し、岩や木に見えない神聖の存在を感じることもある。
この能力は、世界を安心できるかたちに整理するための優れた仕組みであるが、同時に、しばしば「勝手に傷ついたり」「なにかに怒ったり」する原因にもなっている。意味をつけすぎて疲れるのも、彼らの習性のひとつだ。
道具を使う技術も発達しており、かつては石器を手にしていたが、いまではボタン一つで宇宙に何かを飛ばしつつ、ソファから動かずに夕食を注文することができるようになった。その技術の多くは「なるべく楽に快適に生きたい」という、これまた本能的な願いから発明されている。
教育制度も整っており、幼い個体に向けて「どうすれば本能と社会のバランスをとって生きていけるか」を教える訓練が行われる。ただし成功率はまちまちで、思春期や中年期にシステムが一時的に停止する例も少なくない。
彼らの活動はとにかく熱心で、その熱心さゆえに星の資源を使いすぎたり、気候をいじってしまったりといった問題も生じている。だがそれもまた、「もっとよく生きたい」「もっと安心したい」という気持ちの延長線上にある。つまり、やりすぎるのもまた本能の一部なのである。ゆえに、それを完全に止めるのはなかなか難しそうだ。
それでも彼らは、自分自身を見つめ、悩み、詩を書き、絵を描き、ぬいぐるみに相談しながら今日を生きている。
なんだかとても不思議で、そしてちょっと愛おしい生き物である。

大島真由美